



発行所
日本聖公会 沖繩教区
〒901-2102 浦添市前田3-3-5
電話 (098) 942-1101
編集責任 教区事務所
(1部20円)

「それでも日本を愛する」



司祭 ヨハネ 戸塚 鉄也

18歳でイエス様を信じて洗礼を受け、聖公会の一員となつて牧師としていたから52年。やっと定年となりました。京都教区、北関東教区、神学生時代は東京教区、そして最後は沖繩教区の皆さんに本当にお世話になりました。ありがとうございます。

3月末で毎週の説教をしなくてもよいのは嬉しいような、寂しいような、変な感じですが、しかし、最近になって聖書は私を含む全ての人が、特に日本人に向けられた言葉だと確信するようになりました。旧

約聖書はイスラエルの民のため、新約聖書は欧米のクリスチャンのため、だから「日本人の私には関係ない」と思い込み、聖書の中で否定的に描かれるエジプトやバビロニアを、むしろ日本だと考えてきたのです。ローマ皇帝が神格化されるときは日本の天皇陛下を引き合いに出して聖書を読み、説教を作ってきました。しかし最近の目と耳の回復しつつある私に、聖書は私の先祖から未来に向けた本として迫ってきています。アブラハム、族長達、モーセ、ヤンチャなサムソン、ダビデ、ソロモン。みんな日本人の先祖だと私は思います。

その愛と力を受けた聖ヤコブ教会の聖徒達は、喜びと力にあふれて島内や島外の島々、本土、韓国、ハワイ、そして韓国尚州の教会の人たちと共に、モンゴルまでも宣教に出かけました。生き生きとした教会を調べるために、シンガポール、インドネシア、フィジー、ハワイ、アメリカ、イギリスにも一緒に出掛けました。2012年、韓国で行われた「トレスディアス」という超教派の修養会に（聖公会では「クルシオ」といわれます）沖繩本島の他教派の皆さんと共に参加して以来、毎年韓国で行われ、今は沖繩本島や東京でも行なわれる集いに、私たち夫婦と信徒たちは奉仕者として関わって来ました。

あふれる恵みの中でアルコール依存の方々が回復し、家庭が回復し、死んだ金魚や人が生き返るのを間近に見ました。近所の神社の神主さん夫婦が救われたこともありました。アメリカに行った時は、大吹雪で7000機の飛行機が欠航を決めていたのに、私達の乗る1機だけが飛び、前日まで雪と氷に閉ざされていたので来ても移動できないと連絡の入っていた到着地が晴れていて、苦も無く移動できたこともありました。

こうした教会の体験は、まるで紅海が割れるような、天から火の降るようなもの。そして私を頭とする罪人達の回復は聖書の物語そのものでした。しかし私は今でも疑って愚痴を言ってしまうことがあります。それでも聖徒の皆さんも、最近の伴侶も聖徒の皆さんも、最近の保育園の子供たちまでも、時には厳しく注意したり、忍耐をもつて支えてくれたりしています。

初めて行った京都岡崎の平安神宮の隣りの聖マリア教会の司祭、長谷川道夫先生の御恩は忘れられません。「神さまは、それでも、それでもの方なのや。」と言っておられました。イエス様の病人に対する最後の奇跡は、目の見えない盲人の癒しでした。私がやっと少し見えるようになったことも、とっておきのことだったのかもしれない。（宮古では『あとだまがうぶだま』、後

のものほど大きい、という諺があります。）
52年、いや、生まれる前から私を選び愛して下さった天の神様と、イエス様の御身体である教会の共同体に、すべてのご栄光がありますように。あふれる感謝と喜びをもって第二の故郷の宮古島から本土、そして世界に派遣されてまいります。皆様に、いつも天からの導き、祝福が豊かにありますようにお祈りしています。そして、この僕のこともお祈りいただくことがあるなら、本当に感謝です。
(宮古聖ヤコブ教会牧師)

日本聖公会沖繩教区 **教区の日礼拝**
日時：2026年3月20日(金・祝)
午前11時から(午後3時終了予定)
場所：主教座聖堂 三原聖ペテロ聖パウロ教会
司式：主教 ダビデ 上原 榮正
説教者：司祭 ヨハネ 戸塚 鉄也
*礼拝後に昼食会を予定しています。

南静園聖ミカエル教会
聖別解除礼拝

南静園聖ミカエル教会と宮古聖ヤコブ教会から教会合併の提案を受け、沖繩教区では昨年の教区会で南静園聖ミカエル教会と宮古聖ヤコブ教会を合併し、新しい宮古聖ヤコブ教会の設立(教会建物としては既存のもの)を決議しました。高齢化により教会に集まらない、建物が使用されていない状況と、教会屋根部分のコンクリート剥離や建物裏側のがけ崩れ等、危険な個所がいろいろと出ている中、1月24日土曜日に教区主教と常置委員、教区事務所職員、聖ヤコブ教会の皆さん、聖ミカエル教会につながる皆さん達とでお祈りをしてきました。

南静園に着いてまず最初に納骨堂前で逝去記念礼拝をお捧げし、聖ミカエル教会の先輩方に天の国での平安と、礼拝堂聖別解除を報告し、先輩方にも天の国でイエス様と一緒ににみ守っていただきたいとお伝えしました。その後、礼拝堂に移動して聖餐式をお捧げし、礼拝の最後で上原主教により聖別解除をして、新しい地へと派遣されていきました。私自身が3月末の異動のために「私にとって三原教会で最後のクリスマス」や「最後



の特別唱」等と思いなながら少し寂しい気持ちもありながら礼拝をお捧げしているのですが、聖ミカエル教会では礼拝堂が聖別解除され、もうここでパンが割かれることが無いのかと思うと、本当に寂しいと思います。

これまでの聖ミカエル教会の働きに深く感謝致します。教区として教会建物の数が1つ減ることになるのですが、信仰や伝統を、引き継いでいく、ということも教区のみならず、活を送っていききたいと思えます。聖ミカエル教会が、無くなってしまうのではなく、私達の心の中で、新しくなっていく、ということ、みんなが宣教していくということ、をぜひ覚えておきたいと思えます。

最後に、合併して新しくなった宮古聖ヤコブ教会のこれからの歩みの上に、神様の導きと祝福をみんなでお祈りし、支えていきましよう。沖繩教区の宣教の道が主のみに適いますように。

常置委員長

司祭 イサク 岩佐直人

上原主教説教(抜粋)

私たちはこの南静園聖ミカエル教会礼拝堂の聖別解除式を行うためにここに集められました。聖別解除後は南静園の方に移譲される予定です。速やかに移譲され、そして礼拝堂内外の保全、保存が行われていくことを望みたいと思えます。そして、ここがハンセン病と病者の証言の場、差別や偏見の学びの場として用いられ、私たちの周りから偏見や差別が除かれることをお祈りしたいと思えます。

1960年代、好善社をはじめ、療養所を訪問した青年の多くは「自分たちは病者を励ましにやってきました。でも気づいてみると反対に自分が励まされ、勇気をもらって帰っていった。」と口にしました。ボランティアに来た人々の多くが病者から生きる力をもらい、その頃の体験を力にして生きています。私もその一人だと



マイターボックス ― 主教タビテ 上原榮正
人は何をみて育つのか

朝、娘が出勤前に孫を連れてきます。日々の子どもの成長には驚かされます。孫は車が好きで、すぐに何台もある自分のミニカーを取り出し遊び始めます。それが終わると朝食を食べ、ばあば(妻)と散歩に出かけます。散歩に出て、車を見ると指をさし、ばあばの顔を見て、「あーあー、ラックやバスが好きらしく、更に声を張り上げて喜びます。孫を見ていて思い出したのは、私が幼かった時のことです。家の前には県道7号線がありましたが、車が通ることは滅多にありませんでした。通るのは馬車や牛で、時折バスや米軍車が通るだけでした。道路の向こうには漫湖が広がり、横には田んぼがありました。漫湖には朝は漁師が、夕は釣り人が集まり、晩飯のおかずの足しにとテラピアやキスを釣り、ガサミを獲っていました。田んぼにはカメにウナギ、アメンボやトンボの幼虫ヤゴや蛙にオタマジャクシもいて、良い子どもの遊び場でした。しかし1960年代、原子力潜水艦が那覇港に入港し、放射性物質が検出され、誰も来なくなり、

漫湖はゴミ捨て場になりました。漫湖周辺は原野で、色んな野鳥や昆虫がいました。でも、今は埋め立てられ、家が立ち並んでいます。その頃の夜空は手を伸ばせば星に手が届きそうなほど天が近くにありました。最近では周囲が明るく星も見えにくくなりました。昔の子どもと現代の子どもの見ている世界の違いを思います。人間の脳の奥底に記憶されているのは幼い時の経験や思い出だと言われます。言語として記憶され始めるのは4、5歳頃です。それ以前の記憶は言語ではなく、色や形、音や臭いとして記憶されるそうです。心や脳の奥底には、本当に大切なものを記憶させて欲しいと願います。そこには人間の業よりも神の業を記憶して欲しいものです。でも、やはり1番は母親の愛、両親の愛です。それがあれば、文明がどんなに発達しても、心が殺伐とし、大切なものを見失うことはないはずで、す。信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。(1コリント13:13)

思っています。

教会では1960年代に新城
喬司祭が来島。毎週礼拝が行
われるようになり、一番最初
の教会ができました。平良市
内でも伝道を始め、聖ヤコブ
教会内に「ヤコブホーム」を
作り、療養所で生まれた子ど
もたちを引き取りました。

1970年代になると津留孝
夫司祭が赴任。地域からの強
い要望に応え、聖ヤコブ保
育園を開園。当時の園に関わ
たのが順霊母や宮城正子先生
です。また子ども達が育ち空
き部屋になったヤコブホーム
をアパートにして離島の女学
生たちを受け入れました。

1985年に箭野清作司祭が
来島し、二つの教会を建て替
えました。新築後の4月から
私が赴任。二つの教会の親睦
を図りました。イースターに
は野外礼拝、クリスマスは鍋
を囲んで懇親会、敬老の日
にはゲートボール、聖ヤコブ保
育園の園児たちを連れて訪問
したこともあったと思います。

1998年からは、戸塚司祭
が牧会を始め、現在に至って
おります。

今日でこの聖ミカエル教会
の礼拝堂を閉じるわけですが、
決して閉じてはいけないもの
があると思います。それは神
の国の宣教です。私たちは福
音を伝え、この社会を神の国



にしていく。そのために私た
ちの中にある差別や偏見をな
くし、誰もが安心安全に暮ら
せる社会にする。これが私た
ちの使命だと思っています。聖別
解除によって聖ミカエル教会
がなくなるのではなく、聖ヤ
コブ教会と合併し新教会とな
り宣教は継続されるのです。
そして仲兼久さんや大城平永
さんが作ったように、また聖
ヤコブ教会から新しい教会が
誕生していくことを願いたい
と思います。

この南静園に住み、人生の
終末を迎えようとしている人
たちがおられます。最後に、
彼らの上に神様の恵み、み守
りが豊かにありますようにお
祈りいたします。

十 祈りの家教会だより

百歳を祝う「マイ桜命名式」

去る1月28日、国立療養所
沖繩愛楽園において、心温ま
る晴れやかな式典が執り行わ
れました。入所者の皆様が百
歳という大きな節目を迎えら
れたことを記念し、園内に植
えられた桜に名前を付ける
「マイ桜命名式」です。

この記念すべき日、わが祈
りの家教会の信徒であるペテ
ロ上原栄一さんが百歳を迎え
られ、その長寿を祝うために
多くの人々が集いました。

式典が始まった当初、空は
厚い雲に覆われていました。
しかし、栄一さんが桜の名前
を記した看板の除幕を行うそ
の瞬間、まるで天がこの日を
待ちわびていたかのように、
雲の間から黄金色の太陽が
パッと顔を出したのです。曇
り空を一変させたその眩い光
は、除幕されたばかりの看板
と、お二人の笑顔を鮮やかに
照らし出しました。その劇的
な光景に、参列者からは思わ
ず「おおっ！」という驚きと
喜びの歓声が沸き起こりまし
た。それはまさに、神様が栄
一さんの歩みを祝福してくだ
さっていることを確信させる、
神秘的で感動的なひとときで



した。

祈りの家教会の長い歴史を
振り返れば、これまでも百
歳を超える長寿を全うされた
信仰の先輩方は何名もいらっ
しゃいました。しかし、今回
の栄一さんの百歳がこれまで
と決定的に異なり、私たちに
特別な感動を与えてくれたの
は、最愛の妻であるヨシ子さ
んと共に、この節目を迎えら
れたことです。ご夫婦揃って
ご存命で、共に手を取り合っ
て百歳の祝福を受けるとい
うことは、愛楽園の歴史にお
いても、そしてわが教会の歴史
においても初めての出来事
でした。ヨシ子さんはまだ百歳
には至っていないものの、長
年苦楽を共にし、信仰の道を

歩み続けてきた伴侶が世紀の
節目を越えた喜びを、一番近
くで、誰よりも深く分かち合
われました。

式典には、愛楽園園長をは
じめとする園幹部、各セン
ターの職員が多数駆けつけま
した。教会の枠を超え、園全
体が一つとなつて栄一さんの
長寿と、お二人の絆を祝福す
る温かな空気に包まれました。
園長からの祝辞では、栄一さ
んの歩みへの敬意と、夫婦が
仲睦まじくこの日を迎えられ
たことへの感動が述べられ、
職員たちからも感謝と喜びの
声が続々と上がりました。

1月28日の光あふれる瞬間
の中に誕生した「マイ桜」は、
これから毎年、春が来るたび
に美しい花を咲かせます。そ
れは単なる記念樹ではなく、
過酷な歴史の中でも愛を育み、
信仰を守り抜いた「命の証」
として、園を訪れる人々や次
世代の信徒たちの心を癒やし、
勇気づけていくことでしょう。
上原栄一さん、百歳のお誕生
日、本当におめでとうござい
ます。そして栄一さんとヨシ
子さん、これからも神様の豊
かな守りの中で、お二人仲良
く健やかな日々を過ごされる
ことを、教会一同心よりお祈
り申し上げます。

司祭 ベネディクト 高英敦



園だより

ナザレ幼稚園



本園ではこれまで旧暦の12月に合わせ、沖縄の伝統行事に親しむ食育活動としてムーチャー作りを行っていた。しかし近年、那覇市においては全面的配慮から、園児にムーチャーを食べさせることが難しくなった。そこで、沖縄の食文化を大切にしながらも、園で無理なく実施できる代案として「沖縄郷土体験」という名目に変え、「アガラサー作り」に取り組んだ。

本活動では沖縄の郷土料理に親しみ、地域の食文化に触れることをねらいとした。導入では写真や動画、材料を提示しながらアガラサーについて伝えると「初めて見た」「どんな味がするの?」と興味を示す姿が見られた。体験はクラスに分かれて行い、さらに少人数のグループを作り、お友達や担任、保育教諭と一緒に調理に取り組んだ。調理の過程では、材料を混ぜる順番を待つなど簡単な約束事を守りながら協力する姿が見られた。また、色や匂い、混ぜている間の形の変化、蒸す前後の変化に気付き、五感を通して食材に関わる様子がかがえた。



料理への理解を深めるとともに、お友達や保育者と体験を共有する中で、食への関心や地域文化への親しみを育む機会となった。

教諭 大嶺真奈

西日本宣教協働区「祈りのつどい」

神戸・九州・沖縄3教区の兄弟姉妹が祈りを共にすることで交わりを深めたいとする祈りのつどいです。ぜひご参加ください。

第35回：3月12日(木)

19:00～ 担当：神戸教区

ZOOM ID：468 123 1279

パスコード：762780



- 第75(定期)教区会後
■第3回常置委員会報告
日時：2026年1月14日(水)
場所：教区センター会議室
I. 諸報告(教務局会より)
① 宣教部報告
・12月28、29日に聖ジョージの家にて青少年クリスマス会を開催。参加者6名。
・2月15日(日)三原教会にて「主教制の学び」を予定。
② 総務部報告
・3月20日(金・祝)教区の日礼拝を予定。役割等、詳細の確認を行った。
③ 財政部報告
・1月8日(木)財政部会開催。12月の資産運用状況と収支を報告した。
II. 主教連絡
・12月14日(日)にカトリック小緑教会にて県民クリスマスを開催。参加者約200名で大盛況だった。
・3月19日(木)に退職聖職者および夫人の会を予定。
III. 協議事項
1. 人事について。主教より諮問を受けた。
2. 常議員会への議案提出について。
・第75(定期)教区会で決議された「基本財産変更の件

(南静園聖ミカエル教会)の承認申請を日本聖公会常議員会に提出する。申請書内容を確認した。
3. 1月24日(土)に行われる南静園聖ミカエル教会礼拝堂聖別解除式に、常置委員6名、移譲チームメンバー(金山司祭、教区事務所主事)、事務所職員1名が参加することとする。

堅信おめでとう

ルシア 桂 希実子

(屋我地聖ルカ教会)

昨年12月に受洗。今年1月25日(日)に堅信を受けられました。神さまのみ守りの中で、豊かな信仰生活を歩まれますように。

召天

2月4日(水)

マリヤ 石川 富子

(首里聖アンデレ教会)

十魂の平安を

お祈りいたします。

